

はじめに

加藤 英明*¹ 菅沼 文乃*²

1. 特集の概要

本論集は、南山大学人類学研究所の共同研究「デジタル化が生み出す新たな生／知のあり方—記録・身体・モノ—」（2022年度～2024年度、代表 加藤英明・菅沼文乃・高村美也子）の成果を報告した論文集になる。

近年においてデジタル技術は、私たちの社会や生活のなかで存在感を高めており、それとともにアカデミアの世界でも、さまざまなアプローチからデジタルを対象とした、あるいは活用した研究がさかんになっている。とくに文化人類学では、各地域におけるデジタル現象の分析を通じて人びとの営みをあらためて問い直すデジタル人類学の研究（Houst and Miller 2012）が展開しているほか、従来の参与観察を再考するデジタル・エスノグラフィ（Pink et al., 2016）も新たに確立している。また、民族資料や考古資料のデータの記録・保管・共有や3D技術を使用したデジタル・アーカイブの取り組みもさかんになっている。

そのような状況から、本研究会では文化人類学や考古学を専門とする研究者を中心に、各研究員がもつフィールドで、どのように「デジタル化」が進んでいるのか、またそれに伴い新たな生や知のかたちが、どのように生み出されているのか、という問いを切り口に検討した。

本論集では「デジタル化」を、0と1からなる2進コード（オン／オフ）の機能をもつデジタル機器やシステムが、社会に広がり浸透する動きとして定義している。具体的には近年のコンピュータやスマートフォン、インターネット、IoTなどの情報技術の広がりを

指している。ただし、本特集の論文で吉田や後藤が示唆するように、アナログ／デジタルは、本質的には連続的／離散的な値の表現・捉え方の違いでもあり、そのような観点からすれば、デジタル自体は、記号や文字を使用して以来の現象であり人類社会や文化の形成とも深く関わっているものだといえる。したがって本論集のデジタル化の定義は、近年の情報技術の広がり限定して捉えており、非常に狭い範囲の現象を対象にしている、という点も補足しておく。

とはいえ、デジタル化は、現代において情報技術の開発に伴い指数関数的な速度をもって広がっており無視できない現象としてあらわれている。ただし、そのような状況でデジタル化が、一方向的、あるいは一様に広がり、それによって人びとの営みが均質化するわけではなく、同時に各地域の生活や慣習と結びつくことによってさまざまな差異や特殊な現象を生み出している。つまり、地域や生活に根差しているアナログ的な営み——たとえば身体技法や感覚、暮らしのなかの生き方やモノ、記録管理や組織を成り立たせるための諸実践などが前提にあり、デジタル化を通じて、それらが切断・解体するというよりも、むしろデジタルとアナログが結びつき関連し合い、ときには新たなアナログ的な営みを生みだしているといえる。

本論集では、デジタル化を対象としながらも、アナログ的な営み——もともと持っている生や知の営みを逆照射するかたちで浮き彫りにする内容にもなっている。そうすることで、デジタル技術のみに焦点を当てるのではなく、デジタル化の背後にある私たちの営み自体に意識を向けさせる、という点を一考する内容にもなっている。

*¹ 一般財団法人機械振興協会経済研究所／南山大学人類学研究所

*² 三重大学／南山大学人類学研究所

2. 各論の概要

吉田は、宇宙観光といった最先端の観光形態に着目しつつ、その本質には視覚や触覚を通じたアナログな知覚体験があることを丁寧に論じている。観光とは、高度に情報化された社会においてこそ、身体的な実感や感覚的記憶を求める営みであり、「デジタル社会の反フロンティア」として捉え直される。

野澤は、バリ・ヒンドゥーの儀礼歌「キドゥン・ワルガサリ」を通じて、ポストコロナ時代における文化実践の変容を考察する。一次的オラリティに根ざした身体的実践と、三次的オラリティを介した YouTube 上の情報実践を対比しつつ、物理空間と仮想空間が相補的に機能する可能性を示す。

加藤は、金属加工の中小企業の事例を通じて、熟練作業を標準化する経営者の探求から、デジタル技術導入へとつながる過程を分析している。その結果、熟練作業の数値化・言語化を進める標準化とデジタル化に親和性があり、さらには標準化・デジタル化が新たな中小企業の経営スタイルや取引関係を生みだしている点を明らかにする。

後藤は、天体認識におけるアナログとデジタルの関係を問い直し、私たちが星や星座をどのように捉えているのかを考察する。デジタル技術の進歩は、観測や表現の手段を広げる一方で、身体的・感覚的なアナログ体験の価値をあらためて浮かび上がらせる。

渡部は、インカ帝国の記録文書「クロニカ」をめぐる文献の状況とそのデジタル化の課題を丁寧に検証しつつ、紙資料を物質文化としてとらえる立場から、記録の保存・公開・利用制度の再構築を提言している。

菅沼は、老年者向け見守りサービスの現場調査を通じて、デジタル技術導入が地域社会に与える影響と課題を丁寧に描き出す。見守る側と見守られる側という固定的な構図を超え、多様な主体の相互作用と関係調整のプロセスを浮かび上がらせ、デジタル・デバイドや地域文化に根ざした受容の複雑さを照射する。

平田は、IoT 技術を取り入れた育児・家事の実践を通じて、「社会的機械」という概念の具体化を試みている。本論考は、技術と人間の共生的関係を捉え直し、育児における協働の可能性を描く。オートエスノグラフィに基づく記述は、テクノロジーが女性の負担軽減にとどまらず、家族内の関係性や感情のあり方にも影響することを示唆する。

高村は、タンザニアにおけるデジタルマネーの普及

と、それに取り残される高齢者や女性といった社会的弱者の実態を丁寧に描き出している。携帯電話を介した送金の利便性と排除の両面を、相互扶助＝クサイディアナの変容と対比し、現地調査に基づく記述は、今後の実践的研究に重要な視座を与えている。

山口は、医療情報ツールの導入による多職種間の関係性の変容を明らかにし、「協働介入」という独自概念を提起している。そのうえで、糖尿病外来を舞台に、暗黙知の交差を可能にする協働実践を描き、ヒトとモノの相互作用に着目した分析を通して、制度的分断を超える多職種連携の可能性を提示している。

3. 研究会と読書会の記録(所属は当時のもの)

本共同研究では3年の期間中に、8回の研究会を実施し、3回の読書会を開催した。これらの研究会では、地域や対象を限定せず、国内外のさまざまな事例を検討し議論を進めた。

2022年度

第1回研究会

日時：2022年7月3日(月) 15:00～17:00

会場：Zoom

趣旨説明：石原美奈子(南山大学)

共同研究に関する研究動向：

発表①：加藤英明(南山大学)「デジタル人類学に関する研究動向」

発表②：菅沼文乃(南山大学)「デジタル技術と生活との関連に関する研究動向—とくにデジタル活用の実態に関する日本社会を対象とした研究動向—」

発表③：高村美也子(南山大学)「無文字言語のデジタル化は可能か—SNSの役割—」

アイディア発表：全員

今後の運営について：全員

第2回研究会

日時：2022年10月22日(土) 10:00～12:00

会場：Zoom

発表①：渡部森哉(南山大学)「インカ研究に関する記録文書について」

発表②：石原美奈子(南山大学)「地方史の再構築に向けて—エチオピア・オロミア州ジンマ県／市での取り組みとその社会的意義—」

第3回研究会

日時：2023年3月18日(土) 15:00~17:00

会場：Zoom

発表①：吉田竹也(南山大学)「デジタル社会の反フロンティア—宇宙観光を事例に現代観光を考察する—」

発表②：吉田佳世(追手門学院大学)「沖縄に寄り添う楽器—三線の県外普及におけるデジタル化とアナログ化—」

2023年度

第1回研究会

日時：2023年10月29日(日) 14:00~16:00

会場：南山大学人類学研究所1階会議室・オンライン(Zoom)

発表①：加藤英明(南山大学)「NC工作機械をめぐる町工場の人びとの技法とネットワーク」

発表②：野澤暁子(名古屋大学)「バリ島の儀礼歌の伝承状況：儀礼実践とオンライン動画との比較から」

第2回研究会

日時：2023年12月2日(土) 13:00~15:00

会場：南山大学人類学研究所1階会議室・オンライン(Zoom)

発表①：高村美也子(南山大学)「東アフリカにおけるモバイルマネーの実践」

発表②：後藤明(南山大学)「レーザーを用いた遺跡測量技術LiDAR法の現状—ミクロネシア・ナンマル遺跡と佐賀県吉野ヶ里遺跡の事例から—」

第3回研究会

日時：2024年3月16日(土) 13:00~15:00

会場：南山大学人類学研究所2階会議室・オンライン(Zoom)

発表①：菅沼文乃(南山大学)「沖縄県中山間地域における高齢者みまもりとデジタル技術の活用について」

発表②：平田晶子(東洋大学)「多様な「働く女性」や共働き世帯を支える育児IoT空間デザインをめぐる人類学的研究」

2024年度

第1回研究会

日時：2025年2月26日(水) 15:00~17:00

会場：南山大学人類学研究所2階会議室・オンライン(Zoom)

発表①：山口宏美(北陸先端科学技術大学院大学)「重症化予防をめぐる医療現場の多職種協働—情報ツールを媒介とした実践のエスノグラフィー—」

発表②：大谷かがり(中部大学)「電子化をめぐる看護記録のあり方の変容—X訪問看護ステーションの事例から—」

第2回研究会

日時：2025年3月15日(土) 13:30~14:45

会場：南山大学人類学研究所2階会議室・オンライン(Zoom)

発表①：内尾太一(静岡文化芸術大学)「オンライン地図探索プログラムの構築による人類学的フィールドワークの拡張—災害復興の動態分析—」

読書会

第1回読書会

日時：2022年10月8日(土) 13:00~17:00(Zoom)

課題図書：Geismar, Haidy & Hannah Knox (eds.) 2021 Digital Anthropology, 2nd. London: Routledge.

発表者：

加藤英明(南山大学) 第2章 Six principles for a digital anthropology

高村美也子(南山大学) 第1章 Introduction 2.0

石原美奈子(南山大学) 第5章 The anthropology of social media

第2回読書会

日時：2022年12月10日(土) 13:00~17:00(Zoom)

課題図書：Geismar, Haidy & Hannah Knox (eds.) 2021 Digital Anthropology, 2nd. London: Routledge.

発表者：

高村美也子(南山大学) 第4章 The anthropology of mobile phones

石原美奈子(南山大学) 第9章 Digital politics

加藤英明(南山大学) 第10章 Traversing the infrastructures of digital life

第3回読書会

日時：2023年3月25日(土) 13:00~17:00

課題図書：Geismar, Haidy & Hannah Knox (eds.) 2021 Digital Anthropology, 2nd. London: Routledge.

発表者：

野澤暁子（南山大学） 第7章 Disability in the digital age

菅沼文乃（南山大学） 第15章 The role of the digital anthropologist in citizen science and public participation mapping projects

参照文献

Horst, Heather and Daniel Miller (eds.)

2012 Digital Anthropology. London. Bloomsbury Academic.

Pink, Sarah, Heather Horst, John Postill, Larissa Hjorth, Tania Lewis and Jo Tacchi (eds.)

2016 Digital Ethnography: Principles and Practice. London: Sage.